バウムガルテン『美学』訳註

——その3——

松　尾　　大

§232

キケローに従った多くの人々は、この賞賛さるべき（但し美的にであるが）思惟のあり方と、最も重要なことどもについて、できる限り哲学的、学問的に探求するあり方とを混同している[1]。この混同の理由は、かなり重要で、本当に立派な（§211）諸現象を、そして個別的でないだけで、極めて限定された諸々の壮大なこと（§212）を取り巻くのが常のあの輝きがこの両者には欠けている点で、両者が一致するということである。例えば「不死の神々について、敬神について、和合について、友情について、市民の共同体について、人間について、諸民族の法について、正義について、節制について、大きさについて、徳の全ての種類について」[2]思惟せねばならないとしよう。「私は、哲学者らがこれらのこと全てについて片隅で暇つぶしに議論するのは認めるけれども、哲学者らが或る簡素で貧しい言葉」（即ち、その中心的部分は美学の諸規則では検証できず、それらの規則を超越する論理的（§122）言葉）「で論ずることを、全ての重みと快さとを以て展開する仕事は弁論家に割り当て、任せよう」[3]（『美学』§124、123）。キケロー『弁論家について』1、56、57、『善と悪の極限について』3、40、『弁論家』46参照。

（1） 対象の品質の相対的低さと学問性、客観性、論理性との両者がいかなる経緯を辿って平淡体の2つの意味契機になったかはよくわかっていない。バウムガルテンのここの記述によれば、3文体説は元来、対象の品質の高低を以て文体の弁別指標とし、これとは別に論理的、客観的、学問的言述と心理的、主観的、修辞的言述との区別があったのが、或る段階で（おそらくはキケローに於いて）3文体の1つ平淡体と学問的言述との結び付きが生じたということになる。しかしこの点は今日の研究でも必ずしも確定しているわけではなく、例えばヘンドリクソンの如く、3文体説自体の発生を、逍遙学派による論理の言葉と心理の言葉との区別に求める考え方もある（G. L. Hendrickson "The Origin and Meaning of the Ancient Characters of Style", *AJPh* 26 (1905), 249-90)。

（2） キケロー『弁論家について』1、56。

（3） 同　上　57。

§ 233

簡素なあり方の思惟は更にそれ自身の諸段階を容認する（§ 231）[1]。その第1にして最も低い段階は、極めて簡素なあり方の思惟と呼んでよかろう（§ 207)。「他人の領分を侵害しない文法」[2]がその例となろう。ここでこういう限定をつけるのは、

「甘い教師らが子供らにお菓子を与えて、いろはを勉強させる」[3]（ホラーティウス）

とき「文法は、源では（最も）細い流れなのに、詩人や歴史家らの力を受け取って、既に川床を十分一杯にして流れているからである」[4](クィーンティリアーヌス　2、1)。けれども、諸学科の連環全体においては、文法が簡素さを越えて高まることはない（§ 202)。キケローの『カエキーナ弁護』を簡素さのもっと上位の段階に数え入れることにしよう。キケロー自身それを中庸のあり方、及び荘重なあり方と区別された繊細なあり方の思惟に数え入れているのだから[5]。

(1) 既に§207末に於いて、思惟の3つの類はそれぞれ更に諸段階に分かれるとされていた。本段落では簡素なあり方の思惟が2つの段階に分けられている。中間のあり方の思惟については後に§272で3種に細分されている。これに対し崇高なあり方の思惟については、§299に於いて、それが種的な諸段階に分かれるとのみ記されていて、その数については明言されていない。

(2) クィーンティリアーヌス 2、1、1。文法が、本来弁論術の領域に属するprosopopœia(脚色)やsuasoria(虚構の主題についての勧告弁論)まで自分の領域に包摂していることを背景にこう語られている。

(3) ホラーティウス『諷刺詩』1、1、25—6。

(4) クィーンティリアーヌス 2、1、4。

(5) キケロー『弁論家』102:「私の手がけたカエキーナ弁護の事例は、布告の言葉に関するものであった。私は隠された物事を定義で説明した。市民法を賞賛した。曖昧な言葉を明瞭にした」。

§234

簡素なあり方の思惟が自らの論証と素材をかなり実り豊かに表示するならば、それについて次のように語るのも不適切ではなかろう。

「労働は簡素なものに存するが、栄光は簡素ではない」[1](ウェルギリウス、尚、プロペルティウス 3、1[2]参照)。

「リュシアスは一定の愛好者を持っている。それは、体の太った状態よりも痩せている方を追い求める人々である[3]。かれらは、健康であるならば細さそのものを喜ぶ。……リュシアスは、この繊細さそのものを極めて喜ぶ賞賛者を持っている」(キケロー『ブルートゥス』64)。この賞賛者らは鼻[4]が利かぬわけではないし(§230、202)、

「アポローンは常に弓を引き絞っているわけでもない」。[5]

(1) ウェルギリウス『農耕歌』4、6。これは、ウェルギリウスが、蜂という小さな存在者を歌う自分の詩業について述べた言葉である。なお§364註(1)参照。

（2） プロペルティウス　3、1、5：「どんな洞窟であなたがたは歌の細い糸を紡いだのか（tenuastis）。」；同　3、1、7：「目の細かい（tenui）軽石で磨かれた詩句が進むように」。

（3） 文体の品質を人間の体型になぞらえて記述する系譜に属する言葉である。先行例としては『ヘレニウス宛弁論術』4、15がある。「つまり、腫れがしばしば身体の正しい状態に似て見えるのと同様、膨張し、膨れ上がったものが、未熟者らには荘重な言葉に見えることがしばしばある。」因に§218にあるキケロー『トゥスクルム論義』3、19の引用では、身体の状態になぞらえられることによって精神の状態が説明されている。

（4） 「鼻（nasus）」は、バウムガルテンの『形而上学』§607（§35註（2）に引用あり）に於いて sapor, palatum と並んで「広義の趣味」の別称として用いられている。

（5） ホラーティウス『歌章』2、10、19—20。アポローンが時に弓を引き絞り、時には緩めて楽に興ずることに即して、「黄金の中庸」を勧めている部分である。

§ 235

3つの性格のうちの1つだけが、かなり長い美的思考を通じて、美しい思惟内容の個々の要素全てに於いて均一に持続すべきであるという考えを、我々が現在描写している思惟の3種の性格一般について予め抱くべきではない。また、簡素なあり方の思惟についてもそう考えるべきではない（§230）。長い作品に於いては、どうしても均一でない素材が何らかの仕方で結び付けられるが、それに応じてその作品は、ある時は思惟の〈緩み〉と弛緩とを、またあるときは〈高まり〉と高揚とを持つ。これら弛緩や高揚は素材に釣り合い、ぴったりと合っているのである[1]。けれども、そのなかで支配的であり、より強い性格から作品全体の名称はつけられる（§217）。

（1） 同一の作品で幾つかの文体が使い分けられることについては、キケロー『弁論家』111、クィーンティリアーヌス 12、10、69後半、『ヘレニウス宛弁論術』4、16参照。

§ 236

同じく言葉の領域に於いてキケロー（『発見について』2、51）は、「幾つかの論証を一層簡素、鋭敏、繊細に取り扱うこと」を命じているが、「他方、幾つかのトポス」、例えば「事実の惨酷さを増幅するトポス、悪人に同情すべきでないというトポスを告発者が、そして敵の告発が謂れなきものであることを憤りを以て示すトポス、訴えかけによって同情を得るトポスを弁護者が一層荘重、華麗に、際立つ語と内容を以て」扱うべしとしている。喜劇の軽靴は簡素な、また悲劇の長靴は崇高なあり方の思惟を要求することを知らぬ者がいようか。

「けれども時には喜劇も声を上げ、怒ったクレメースが口を膨らませて罵ることもある。逆に、悲劇のテーレプスやペーレウスも、もし観客の心を憐れみに動かそうとするなら、共に貧乏な亡命者として、大言壮語も、長々しい言葉も捨て、日常語法で嘆くこともしばしばある」[1]（ホラーティウス）。

（1） ホラーティウス『詩学』93—8。

§ 237

簡素なあり方の思惟を既にキケローが「繊細な」と呼んでいるのを我々は見た（§ 233）[(1)]。そしてクィーンティリアーヌス（8、3）は、明確に、「繊細に」語ることと、「壮麗に」語ることとを反対のものとしている[(2)]。

それは、M、§ 576[3]が提示するようなものとは別の意味でなされているのではあるが、語彙の類似性は、事柄の混同、即ち哲学者の鋭い区別と、簡素で、最も荘重でない思惟のあり方との混同という結果に少なからずなっている（§ 232)。簡素なあり方の思惟は、必ずしも全ての装飾を蔑むわけではなく、むしろ機知と滑稽とを（§ 202)——但し単純に立派なものであるが（§ 231)——追い求めることも稀ではない。他にもあるかもしれぬが、少なくともこの性格は遊戯的なあり方の思惟[4]をもたらす。それによって君は〈小さなことを大きく〉[5]、エイローネイア的に言表することができよう。例えばホラーティウスが、『談論集』1、2冒頭で直ちに次のように言う時、長く大きく堂々とした言葉を〈崇高さ〉の重要な長所として求める人々をからかっているように思われる。

「シリアの笛吹女の組合、いんちき薬売り」、
もう沢山だ！　なんと「長々しい言葉よ！」[6]しかし、さあ、単純な簡素さを見るがよい。

（1）§ 231冒頭で簡素さの6つの別称が括弧の中に挙げられていたが、以下それらのうち5つが吟味、説明されていく。即ち、「繊細な」（§ 237—8)、「細い」（§ 239)、「控えめの」（§ 239)、「精妙な」（§ 240)、「アッティカ風の」（§ 240)。

（2）クィーンティリアーヌス　8、3、40：「つまり第1に、何かを増幅しようというのか、縮小しようというのか、高揚して語るのか、抑えて語るのか、快活にか、厳粛にか、豊麗にか、圧縮してか、荒々しくか、穏やかにか、壮麗にか、繊細にか、荘重にか、都会風にか」。

（3）『形而上学』§ 576：「この世界にあるもの全ては、部分的には同じであり、部分的には異なっている（§ 265、269）から、それらに於ける同一性と差異性の表象、従って又**天性の**（生産的な）**戯れ**、即ち天性に由来する思惟、及び繊細さ、鋭敏さに由来する思惟は、宇宙を表象する魂の力を介して現実化する（§ 513)。偽りの**天性の戯れ**は**瞞着**、偽りの繊細さは空虚な屁理屈と呼ばれる」。

（4）§ 729参照。

（5） イソクラテース『オリュンピア大祭演説』8（§ 341 本文中に引用あり）。プラトン『パイドロス』267 a 7—8：「又、言葉を介して、小さいものが大きく、大きいものが小さく見えるようにし、……」。
（6） ホラーティウス『詩学』97。尚、§ 236 参照。

§ 238

しかしながら、物事を識っている批評家の「繊細な趣味」[1]ならば、「最も鋭く、最も繊細な」[2]ものを、この簡素なあり方の思惟に求めることはなかったであろう。その理由の1つは、鋭さと明敏さとの最高の力を簡素な素材（§ 231）に費やすとしたら、それは空虚な屁理屈と変わるところがないということであり（M、§ 576[3]）、もう1つの理由は、「真理そのものが議論に於いて磨かれるときのその繊細さ」[4]は全く美的地平に属さないか（§ 121）、或は少なくとも、単純に立派であり、美的に把握された性格には十分よく一致しないということである（§ 231、228）。かなり単純に生きる簡素な仕方の性格には、「明晰というよりもむしろ繊細に語ること」[5]は属さない（§ 213）。この意味での思惟の「洗練された繊細さ」は「豊麗に」思惟するあり方にすら矛盾せぬものであり、そして高邁な性格自体に求められるべきものである（§ 230）。

（1） ホラーティウス『風刺詩』2、8、38。
（2） キケロー『弁論家について』2、98。
（3） § 237 註 (3) 参照。
（4） キケロー『義務について』2、35。
（5） キケロー『トゥスクルム論議』1、41。

§ 239

もし私が思惟のローマ的名称を引き出すことに努めるならば、思惟の細

いあり方が、中間の性格の１つであり、高揚した豊かな思惟のあり方と対立すべきものであることを、かかる語り方についてキケローが語っている箇所から証明することができよう[1](§ 231)。ホラーティウスが

「イーリオンの歌を芝居へと引き降ろす（deducere）方がよい」[2]

と言うとき、叙事詩の方が悲劇そのものより壮大であり、物事は叙事詩から悲劇に移し換えられると細くなるように見えると暗に示しているようである。それ故、調子をおとした（deductum）単純な思惟のあり方は、簡素さにまで押し下げられたものまでも指しているように思われる。『牧羊詩』の大部分はそのようなものである。

「私が王と戦争とを歌っていたとき、キュンティウス・アポローンは耳を引っ張り、こう忠告してくれた『テーテュルスよ、羊飼いは羊に餌をやって太らせ、調子をおとした（deductum）歌を歌うべきである』」[3](§ 155)。「私は簡素な葦笛で田舎の詩神（ムーサ）をうたおう」[4]（ウェルギリウス）。

「ウァルスよ、私の御柳（§ 180）は君のことを、全ての森は君のことを歌うだろう」[5]（ウェルギリウス『牧羊詩』6、3)。

これに対しホラーティウスが「自分で自分の葡萄の木を切り倒しつつ、我我詩人は」[6]

「我々の労作と、細い糸で織り上げられた（deducta）[7]詩とが日の目を見ないといって嘆く」(『書簡詩』2、1、225)

というとき、疑いもなく § 179 でいう〈エイローネイアを語っているもの〉と解されることを望んでいた。

（1） キケロー『ブルートゥス』201：「さて、我々の主題である良い弁論家には2種ある。一方は細く（attenuate)、簡潔に、他方は荘重、豊麗に語る」。同、283：「従って、彼の言葉はあまりの几帳面さの故に細くなり（attenuata)、識者や注意深い聴衆には際立つものだったが、雄弁の土俵である大衆やフォルムからはとび去った」。

（2） ホラーティウス『詩学』129。
（3） ウェルギリウス『牧羊詩』6、3—5。
（4） 同　上　8。
（5） 同　上　10—1。
（6） ホラーティウス『書簡詩』2、1、219—20。
（7） 平淡な文体を細い糸の織物に喩える系列は、ホラーティウスのこの箇所からアウソーニウス（§ 230 註（1）参照）を介してスカリジェルに至る（lbA）：「しかし一方のものの確実な信用は真なるものを公言し、生み出し、一層簡素な糸で言葉を織り上げる」。又、一般に著作活動を機織りに喩える例は第2巻序言冒頭にある。

§ 240

ひとりウェルギリウスのみが

「嘗て細身の麦笛を吹い」[1]（『アエネーイス』1、1）

たわけではない。弁論に於いても、あのギリシァ人らに特有であり（§ 56）、ローマ人には模倣できないと言われた（§ 187）或る種の精妙さ[2]と繊細さ（§ 237、238）は、アッティカ的なあり方の思惟[3]に関係づけられていた。クィーンティリアーヌスはこうローマ人らを慰めている（12、10）。「我々はあれほど精妙になれぬのか。それなら我々はより強くあろう（M、515[4]）。繊細さの点で我々は負けるのか。それなら重さで優るようにしよう（M、§ 166）」[5]。同時に彼は「喜劇作家らは、ペリクレースを罵るときでさえ、彼を稲妻と天の轟きに喩えているが」[6]、この（アッティカの）ペリクレースを「リュシアスの精妙さに似ていると考える」[7]ことができぬのだから、「細い筋をなして小石の間を流れるこの人々にアッティカの風味を認める」[8]のは誤りであると忠告しているのは正しい。クィーンティリアーヌスは、また別の箇所で、「童話にすぐ続くイソップ物語に精妙さを」[9]帰している。しかし、この物語の故に、天性の最も優れた評価者

である

「アッティカ人らはイソップの巨大な像を立て、奴隷を不滅の台座に据えた（§ 234)。名誉への道は開かれており、栄光は生まれでなく、力量に与えられることを万人が知るようにと」[10]（パエドルス　2、9)。

（1）　4世紀のラテン文法家ドーナートゥスの『ウェルギリウス伝』、同じく4世紀のラテン文法家セルウィウスの『アエネーイス註解・序』の伝えるところよれば、この句を含む4行がウェルギリウスの『アエネーイス』冒頭に置かれていたのを、トゥッカとワリウス（いずれもウェルギリウス死後この詩を編纂した詩人）が削除したという。その4行は次の如し。

「かつて細身の麦笛を吹き、森から出て、周囲の畑が農夫の欲求に従うよう私は強いた（これは農夫らには喜ばしい作品であった）けれども、しかし今はマルスの恐ろしい……」

（2）　ここで「精妙さ」と訳したgracilitasは、§ 234のキケロー『ブルートゥス』64の引用に於いて「痩せている方」と訳されたのと同一語である。又、本段落冒頭のウェルギリウスの引用中にある「細身の」の原語 gracilis はその形容詞形である。平淡体の最も一般的呼称は「繊細体」genus subtile であるが、それに次いで「精妙体」g. gracile もよく用いられる（例えばゲリウス、6、14、2)。

（3）　様式概念には記述概念としての面と規範概念としての面とがある。3文体の区別では比重が前者にかけられているのに対し、アッティカ派とアシア派（とロドス派）という区分では規範概念としての性格が強く出る（クィーンティリアーヌス、12、10、16参照)。

デーモステネースの死後、アテーナイ弁論の凋落に伴い、小アジアで別の弁論様式が興隆した。文体の派手さ、冗長さを特色とするこの派は「アシア派」の名で呼ばれた。キケローは『ブルートゥス』51でこう語っている。

「しかしギリシァ以外でも弁論に大きな努力がなされたし、この長所に帰された最大の栄誉は弁論家の名を輝かしくした。つまり、ペイラエウス港から雄弁が輸出されると、それは全ての島々に浸透し、全アジアを渡り歩き、外国の仕方を身に付け、アッティカ言葉のすべての健康、健全さを失い、殆ど語ることを忘れた。ここからしてアジアの弁論家らは、確かに速さ、豊かさ

の点では軽蔑されるべきではないが、あまり簡潔でなく、あまりに豊かになった。」

それへの反動として、古典期アテーナイの弁論スタイルを尊重する者らが現われた。所謂「アッティカ派」である。従ってアッティカ派／アジア派という区分自体が、前者を後者に優先させる明確な価値判断に裏付けられたものであった。

ところで、この派はアテーナイの弁論家のうちでも特にリュシアスの平淡体を以て自らの理想とした。ここから、むしろデーモステネース派の荘重な文体に傾くキケローとの間に或る種の対立が生じた。キケローは「アッティカ風」とはリュシアスのみによって代表されるわけではないという主張を以て「アッティカ派」に答えている。これについては、§ 248 で引用された『最もすぐれた弁論家の類について』12、§ 260 で引用された『トウスクルム論議』2、3、§ 715 で引用された『弁論家』28、§ 894 で引用された『弁論家』26 を参照せよ。

（4）『形而上学』§ 515：「いかなる認識も全面的に不毛ではない（§ 23）けれども、一層大きな効果又は力を持つ認識は一層強く、一層小さな効果又は力、つまり弱さを持つ認識は一層弱い（無力、鈍い）。一層弱い表象が生じたとき、それは魂の状態を一層少なく変え、一層強い表象は一層多く変える（§208、214）。

（5）クィーンティリアーヌス　12、10、36。

（6）アリストパネース『アカルナイの人々』530：「それから、オリンポスのペリクレースは稲妻を光らせ、雷鳴を轟かせて……」。キケロー『弁論家』29：「ペリクレースがもし平淡体を用いたならば、詩人アリストパネースは『稲妻が走り、雷鳴が轟き、ギリシァを湧き上がらせる』とは言わなかったであろう」。

（7）クィーンティリアーヌス　12、10、24。

（8）同　上　25。

（9）同　上　1、9、2。

（10）パエドルス　2、9、1—4。

§ 241

書簡と対話とは一般にこの思惟のあり方に関係づけられるが、それは誤

りである（§ 231)。確かにキケローは「書簡では」パピーリウス・パエトゥス[1]と「平民的な語法で語る」[2]ように思われた。だが読んでみるがよい。そうすれば我々が時として下劣で卑しいものと呼ぶものの概念からでなく、ローマ平民という一層狭義の概念から「平民的」という語をここでは理解せねばならぬことがわかるであろう。しかし、たとえその「平民的」という語が「簡素な」の代わりに置かれたのだとしても、次のような推論は妥当するだろうか――キケローがパエトゥスに対し、質素な語法を用いた以上、いかなる書簡でも簡素さを越えて思惟を高めてはならない――。確かに「我々は日常語で書簡を書くのが普通である」[3]（『友人宛書簡』9、21)。それとも物事ですら、日常的なもの以外は手紙に挿入してはならないのか。§ 96、114 は、どんな真理が誤りのもとに潜んでいるかを教えてくれるだろう。

（1） キケローの友人で、エピクーロス派に属していた。
（2） キケロー『アッティクス宛書簡』9、21、1。
（3） 同　上。

§ 242

何人かの人は[1]、簡素な語り方における長所として、1）固有性[2]又は純正さ[3]、2）明晰性[4]、3）蓋然性、4）明証性を挙げている。何人かの人はこれらは全て美しい思惟の全ての性格に共通の特質であると言っているが、これは正しい（§ 22)。もし先人の考えにならって転義の不在として純正さをとらえるならば、後者の美（純正さ）は前者（固有性）を包摂するであろう[5]。同じような理由で明証性は明晰性と蓋然性すなわち真実らしさとを包摂するだろう[6]（M、§ 531)。かくして装飾の欠如と明証性とが残ることになろう。しかし前者は長所ではないし、全てのあり方の思

惟にあるわけでもなく、簡素なあり方の思惟のみにある（§ 247)。後者は2つの名目[7]のもとに、至るところで要求される（§ 22)。では、この性格（簡素）に固有なものとして何が残っているのか。（正しく理解してのことだが）上述の両者だけでなく、かなり多くのものが残っている。キケロー『弁論家』76—90を参照せよ[8]。

（1） 以下、措辞、文体の「長所」について語る場合、文体一般の長所を考察する系列と、文体の各々に固有な、又は特に関係の深い長所を考える系列の2つがあることが指摘される。前者には、アリストテレス、テオプラストス、『ヘレニウス宛弁論術』4、17以下、キケロー『弁論家について』3、37、クィーンティリアーヌス 1、5、1；11、3、30、フォルトゥナーティアーヌス 3、8、スルピティウス・ウィクトル 15等が属し、後者には『ヘレニウス宛弁論術』4、8、11、キケロー『弁論家』79、ゲリウス 6、14、3 が属する。

（2） アリストテレス『弁論術』3、2、2、1404 b 5—6：「さて、名詞、動詞のうち固有語は明瞭にする」。

（3） 慣用語法に適った言葉を「純正な」と形容している例は次の如し。『ヘレニウス宛弁論術』4、8、11：「平明体とは純正な話し方の持つ日常語法にまで降りたものである」。キケロー『弁論家』79：「語法は純正で純粋であろう」。同 5、14、33：「純正で明晰で際立った語法」。同 11、1、53：「純正で明晰な語法」。

（4） この長所に対する古典期の名称は「平明 (planus)」又は「明晰 (dilucidus)」が一般的である。ハルムの編纂した古代後期の修辞学者のうちでは、ひとりスルピティウス・ウィクトルのみがこの名称を用いている (Halm, p. 320, 1. 32; 1. 36)。

（5） クィーンティリアーヌス 8、2、1 では固有性は純正さでなく、明晰性に関係づけられている：「明晰さは語における際立った固有性による。しかし、固有性は一義的に受け取られているわけではない。つまり、第1の意味は各々の事物固有の名称である。これは必ずしも常に用いられるわけではない。猥褻、不適当、低俗なものを我々は避けるであろう」。

（6） 明晰性 (perspicuum) と蓋然性 (probabile) を結び付ける伝統の淵源近くに、次の箇所におけるクィーンティリアーヌスは立つ。8、3、61：「装飾とは、

明晰性と蓋然性を越えるものである」。バウムガルテン内部で考えても、『形而上学』§ 531 末の文「確実な明晰性が明証性である」によれば、明証性は、認識の6つの長所（§ 22）のうち、確実性と明晰性の足し算によって得られる。然るに、§ 531 中段の文によれば「真理性の意識」が「確実性」である。然るに、美的真理は真実らしさであり（§ 483）、蓋然性は美的真の一種である（§ 485）。従って、ここで述べられる如く、「明証性は明晰性と蓋然性すなわち真実らしさとを包摂する」ということになる。

（7） すなわち、「明らかさ（明晰性）」と「確かさ（説得性）」。

（8） キケローの『弁論家』76—90 では平淡体の特徴として「一種の潤い」と「完全な健康さ」(76)、リズムの点での自由さ（77）、目立たない装飾（78）、文彩の控えめな使用（83）等が挙げられている。

§ 243

Ⅰ、純正さ。即ち、簡素なあり方の思惟を絶対的美的大きさと品位（§ 202）よりも下に押し下げるかもしれない汚れを欠いていること。これに結び付いているのが、簡素なものについての思惟をその素材における自然的大きさの限界を越えて高めたり、対象にふさわしい品位と単純に立派な特性の境界を越えて高めるような全ての装飾に対する周到な警戒である（§ 231）。Ⅱ、明証性。単純に立派な生き方に自らを委ねた人々の全て（§ 213）、つまり、かかる心性に釣り合った天性の陶冶を前提しうる（§ 45）人々の全てが、真実らしさ、明晰さ、説得性（§ 22）の点で達成しうると期待しうるだけの量のもの。

§ 244

思惟の簡素なあり方に固有の長所を私はかなり多く予示した（§ 242）。その1つを今、例として引くのがよかろう。Ⅲ、あの緊密な短さ（§ 166）。

これは、端的に立派で、釣り合いよく陶冶された天性（§ 243）を持つ人間から正当に期待しうるものである（§ 231)。たとえ卓越することがなくとも、さほど獲得し難いものでもなく、他人が与える場合には、節度ある判断によって讃められるべきものである。これら（Ⅰ—Ⅲ）がどれほど異なりつつ、しかし互いに調和しているかを、ローマを描写している2つの例で見ることにしよう。

Ⅰ、「メリボエウスよ、ローマと呼ばれる町を愚かにも私は、我々羊飼いが羊の柔らかい子らをしばしば追っていったこの我々の町マントゥァに似ていると思っていた」[1](ウェルギリウス『詩選』1)。

この極めて簡素なもの（§ 233）は、ラテンの韻律を用いることを知っている、単純に立派な人なら誰からでも私は期待することができよう。なぜなら、これは事柄には関わらぬからである（§ 18)。

Ⅱ、「客人よ、あなたの見ている全てのもの、今、最も偉大なるローマがあるところは、プリュギアのアエネーアス以前には丘と草地だった」[2](プロペルティウス　4、1—35)。

これは、簡素なもののうちではかなり大きいけれども、しかし立派な人なら誰もがとらえることができるものであり、立派なものにおいて単純に生きる小さいあり方からでも、しかし熟慮を以て是認することができるものであると私は考える。

（1）　ウェルギリウス『牧羊詩』1、19—21。
（2）　プロペルティウス　4、1、1—2。

§ 245

思惟の簡素なあり方と正しく区別せねばならぬのは、1、確かに簡素ではあるが、絶対的には大きな事柄（§ 202）についての思惟で、それらが

その本性に逆らって単なる些事と子守り歌に変形してしまうほどにそれらの事柄を押し下げるものである（§ 191）。これは**〈低さ〉の第2の類**（§ 217）であり、かなり大きな事柄について、些事にのみ釣り合った思惟を暖めている**真面目な場面でたわ言を言う者の**第1の思惟の類である（§221参照）。

§ 246

簡素な性格には、乾いていて、貧弱で、干からびて、血の気がなく、貧しく、浅薄なあり方の思惟が、まるで唯一の欠点であるかの如く対立させられるのが普通である[1]ことを、私は知らぬわけではない[2]。しかし、1）簡素な性格は膨張の一種をも自らの反対物として持っている。2）乾いていることは、悟性と理性、それもかなり純粋な悟性と理性の、より厳格な思考に於いても、思惟の論理的なあり方と美的なあり方を区別することを知らぬ、誤って選ばれた検査官らによってひどく非難される[3]ばかりでなく、美的な思考そのものに於いても、資格ある判定者によって賞賛されることもよくある[4]。「自分の夫が乾いていて（＝堅固で）、質朴で、温和で、妻を最も愛していると考えた」[5]プラウトゥスのあの女を例に出すまでもなかろう。キケローが「簡潔体の弁論家（§ 230）は貧しさと不毛さとを（§ 120、128）警戒せねばならない」と言うとき、いかにそれを為すべきかをコッタの例で示そうとして、この人について「彼の弁論には無垢なもの、乾いたもの、健康なもの以外何もなかった」と言い、続けて賞賛している（『ブルートゥス』202）。確かにここでは乾いたものは咎められているのではない。

（1） 確かに古典修辞学の主流を成すのは、文体の1つの長所に1つの短所が対応するという考え方である。例えば『ヘレニウス宛弁論術』（4、15）では「さて、

これらの文体を追求しているうちに、近くに隣接する欠点に陥らぬよう警戒せねばならない」とされているし、又、ゲリウス（6、14、4）は「これらの長所にはそれぞれ同族の短所が同じ数だけある。それらは偽りの虚飾で長所の節度と持ち前を装うものである」と言っている。

この考え方に対し、バウムガルテン自身は、§ 217 で、対象の大きさより小さいものと大きいものと2つの欠点が生じうるとし、§ 230 では、3種の思惟のあり方が「いずれも二種の〈逸脱〉を伴っている」と言う。この考え方は元来、価値は両極端の中間にあるとするアリストテレースに由来する（§ 254 末参照）。即ち、価値を中間に据えることは、その価値からの逸脱が過剰、不足いずれの方向にも可能であることを前提とする。アリストテレースは『弁論家』3、2、1 で、対象の品位より下でも上でもない措辞が適合性を持つものであるとしている（cf. G. L. Hendrickson,"The Peripatetic mean of style and the three stylistic characters", *AJPh* 25 (1904), 125-146, v. p. 129)。従ってバウムガルテンは、この問題については、修辞学の一層古い層への回帰を行っていると言える。

（2） 以下、バウムガルテンは 1）から 7）迄の番号のもとに、この文の内容に批判を加えていく。このうち 2）—7）の6者は、簡素な性格に対立するものとしてここで挙げられた6つの概念である。つまり、2）乾いたもの（§ 246—8)、3）貧弱なもの（§ 249—253)、4）干からびたもの（§ 254—7)、5）血の気のないもの（§ 258)、6）貧しいもの（§ 259)、7）浅薄なもの（§ 261)。

これに対し 1）では、今紹介された見解では簡素な性格に対立するものとされないが、バウムガルテン自身の見解では簡素な性格の対立物の1つである「膨張の一種」が挙げられる。

（3） これは § 250 で説明される。

（4） 以下にバウムガルテンの挙げる例の他に次のものがある。キケロー『ブルートゥス』285：「これに対し、貧しさ、乾燥、貧弱さでも、それが洗練され、都会的で、優美でさえあれば、それをアッティカ風のあり方としても、その限りでは正しい」。キケロー『最もすぐれた弁論家の類について』8：「しかし、これだけができた人々は、その限りで健全で乾いていると思われるが、体操教師のようなものである」。クィーンティリアーヌス 11、1、32：「しかし、乾燥した、神経の行き届いた、引き締まった語り方は、若者の場合、厳密さへの偏愛そのものの故にしばしば嫌われる」。この様に「乾いた」が好ましいコノテ

ーションをもって用いられるときには、それは、余分の脂肪を持たぬ引き締まった身体からのメタファーである（cf. A. E. Douglas. *M. Tulli Ciceronis Brutus*. Oxford. 1966, p. 146)。

（5） プラウトゥス『アシナーリア』5、2、7、856—7。

§ 247

クィーンティリアーヌスが 2、4 で「いまだ幼い年代は、より多くのこと（第 8 節）を試み、発見し、発見したものを喜ぶがよい。まだそれが十分乾いた、厳格なものでないにしても。（過度の）豊かさは治療しやすいが、不毛さはどうしても克服しえない」[1]と最善の忠告をするとき、彼は乾いたものを、成人にふさわしい品位の長所に入れているように思われる。マクロービウスは、「ウェルギリウスの雄弁を」「時には乾いており、時には花やかであるとして」[2]賞賛している。他方、ゲリウス（14、1）が、「ファウォーリーヌスが豊麗さと優美さを以て、より広く、より快く、より輝かしく、より流暢に仕上げたものを」、自分は「乾いた、不完全な（§ 113)、殆ど単一の言葉で触れるだけである」[3]と言うとき、ここから明らかなのは、「乾いたもの」は、それが欠点に転ずる場合には、絶対的な又は何らか相対的な美的大きさ（第15節）よりも、寧ろ広さと豊麗さ（第 8 節）に対立させられるべき〈逸脱〉であるということである[4]。しかし、これらのことに通暁せる批評家ら[5]も、思惟の美しい外延と麗しい内包[6]とを混同したことを一層しばしば我々は見出だすことになろう（§ 187)。

（1） クィーンティリアーヌス 2、4、6。尚、§ 254 にあるクィーンティリアーヌスの引用参照。

（2） マクロービウス『サートゥルナーリア』5、1、19。

（3） ゲリウス、14、1、32。

（4） このことは、ゲリウスの引用が示す如く古代の考え方であると共に、バウム

ガルテンの生きた18世紀の考え方でもあったらしい。バウムガルテンの『形而上学』§ 531 では「思惟と言葉の生動性は輝き（光輝）であり、その反対は乾燥（棘のあるあり方の思惟、言葉）である」（§38 註 (1) にも引用あり）とされており、又、カントの *Reflexion* 2368 では「外延的明瞭性は外的徴表、内包的明瞭性は内的徴表による。前者は並列された徴表、後者は従属する徴表による。前者は広げられた明瞭性、後者は深い明瞭性である。前者の欠如は乾燥 (Trockenheit)、後者の欠如は浅薄」とされているから、乾燥が外延的明瞭性の欠如であることは共通の理解であったと考えられる。然るに『美学』で挙げられる6つの美的品質のうち外延的明瞭性に直接対応するのは「明るさ」であるが、これは後述されるものなので、ここでの説明の為に先取するのは論述の順序からして望ましくない。従って、既に説明された2つの美的品質、つまり「豊かさ」と「大きさ」のうち一層多く（外延的）明瞭性を条件づける「豊かさ」の欠如を以て「乾燥」を説明するに至ったものと思われる。

（5） ゴットシェート、Ⅱ、3．§.p.96：「しかし、これを知る者は特別の名前を保持し、批評家と呼ばれる。つまり、私が批評家として理解するのは、自由な技術について哲学したり理由を示しうる学者に他ならない」。

（6） 思惟の外延とは「広さ」、内包とは「大きさ」のことである。

§ 248

それ故、**乾いたあり方の思惟**は、比較的短いものであるが、美的倹約がそれを命じた場合には（§ 164、246）賞賛に値し（§ 246、第14節）、或る種の美的広さ（§ 116、247）の方が望ましかったならば非難に値する[1]。私はキケローの『最も優れた弁論家の類について』12をこの定義から理解する。「聞くことを軽蔑することが知性のすることであると彼らが考え（§ 242、243）、卓越せるものと壮麗なものとを喜ばない場合に、自分らは何か繊細で（§ 237、238）、洗練されたものを望み、荘重で、華麗なものを軽蔑するのだと言うのはかまわない。しかし、繊細に、つまりいわば乾いた仕方で欠点なく語る者のみがアッティカ風に語るのだと言うのは止めるがよい（§ 240）。豊かに、壮麗に、豊麗に、それでもやはり欠点なく語る

ことがアッティカ風なのである」。

（1）「乾いたもの」を欠点とする例には次のものがある。フォルトゥナーティアーヌス 3、9 (Halm, 126, 6—7)：「平淡体の反対は何か。干からびたもの、乾燥したものである」。

§ 249

3）プリーニウスに従うならば、「貧弱な」[1]は「乾いた」と殆ど全体的に同義語であるように見える（§ 246—8）。プリーニウスの時代には美的理論——ここでは実践と対比されたものとしての理論のことだが——は、当のキケローの時代よりも高く持ち上げられていた[2]。というのも、このプリーニウスが『書簡集』5、17 で、「適切かつ多様に高められたかと思うと、静まった。卓越したものを抑えたものと、貧弱なものを充実したものと、快いものを厳格なものと取り替えた。全てに対し同等の資格を以て」[3]と言うとき、a）貧弱なものをも彼はここで賞賛しようとしていること、b）しかしそれを卓越したものでなく、充実したもの（すなわち相対的に広く拡散したもの）に対し区別していること、c）卓越したものに対して抑えたものを、高められることに対して静まることをかなり明確に区別していること、以上の 3 点を見ぬ者がいるだろうか。そしてキケローも、「貧弱な富を豊かな富に」対立させるときには意見を異にしてはいないことに注目せよ。

（1）「貧弱な」を欠点とする例としては次のものがある。キケロー『弁論家について』2、159：「ストア派は……透明、流麗、円滑でなく、貧弱で、干からびた、切り詰められた、こまごましい文体を用いて妨げとなる」。

（2）プリーニウスにおいて美学の比重が高かったことは、既に § 167 で言及されている。

（3） 小プリーニウス『書簡集』5、17、2。

§ 250

キケローは、§ 246 で指摘された誤りに陥っているときですら、貧弱なものと乾いたものとの一致を認めている（§ 249）。それは『弁論家について』2、159 で次のように言うときである。「ストア派（§ 122）は、いかなる仕方でも解きほぐしえないという多くのことを見出だし（§ 121）、透明でなく、円滑、流麗でなく、貧弱で、干からびた、切り詰めた、こまごましいあり方の言い回し」（及び思考）「を持ち出す（§ 121）。このあり方をもし誰か」（一層純粋な悟性と理性を擁護する人）「が認めるとしても、弁論家にはふさわしくないことを認めるという条件付で認めることになろう。なぜなら我々のこの」（美的）「言葉は、大衆の耳に合わせねばならない。それは心を魅了し、感動させ、金細工師の秤でなく、一般人用の或る種の秤で量られるもの[1]を証明するためにである。」

（1） この引用文中の「金細工師の秤でなく、一般人用の或る種の秤で量」るという言い方は、§ 359、903 でも、論理的規準と美的規準の説明に用いられている。文藝を秤で量るという表現は多分アリストパネースの『蛙』799「文藝を秤で量ろうというのだ」が嚆矢であろう。ローマではワッローの断片 419（ノンノス、p. 455）に次のものがある。「従って、彼が髭のある口で喋り、言葉を1つ1つ黄金の秤で量るのを見るがよい」。

§ 251

「我々の感性から遠く離れているもの」（§ 250）が全て「粗く、貧弱」（§ 249）であるとは私は決して認めたくはない。この並はずれた混同を覆い隠し、更には弁護するための実例を見出だすことはキケローにはやさし

かったし、事実彼はそれを『弁論家について』1、83 で挙げている[1]。けれども、より判明で、より厳密であるべき哲学者らの思惟のあり方及び美学のうちに、かかる実例を今日見出だすことは、キケローにとってほど容易くないものであってほしい。しかし、デーモクリトスやプラトーンらがうまく論じたのと「同じ事柄について、貧しく、貧弱に論じた人々がいた。例えば、最も鋭く論じたと言われるクリューシッポスがそうだが、それだからといって哲学を満足させなかったというわけではない」(『弁論家について』1、50) と報告するキケロー、或はそう言いたいならキケローの書に登場するクラッススは弁解の余地はない。なぜなら彼はこう続けているからである。(デーモクリトスやプラトーンなど)「私が名を挙げた者らの弁論に於ける豊かさ、豊麗さと」、(クリューシッポスなど)「弁論のかかる多彩さ、洗練を用いぬ者らの貧弱さとの違いは何か、また、どのようにそれらを見分ければよいのか。巧く語る者らが自らのものとして挙げる1つのものがあるだろう。それは、よく配列され、或る種の技巧と洗練によって際立たせられた弁論である」。

(1) キケロー『弁論家について』1、83:「そのアテーナイの学者らのうちの或る者、例えば君の言うムネーサルコス自身こう言った。『我々が弁論家と呼ぶような者は、素早い、達者な言葉の職人にすぎない。又、賢人でなければ弁論家ではない。そして、よく語る学から成る雄弁自体、1つの徳であり、1つの徳を持つ者は、全ての徳を持ち、それらは互いに同等、対等である。それ故、雄弁な者は全ての徳を持ち、賢人である』。これはしかし、一種の粗く、貧弱な弁論であり、我々の感覚から遠く隔たっている」。

§ 252

それについての裸の真理をデーモクリトスやプラトーン等がかなり美学の外套に包んで[1]提示したのと同じ事柄について、クリューシッポスは83

節で述べられたムネサルコスと同じほど惨めに哲学したのであり、美学の規則によるよりも遙かに哲学を満足させること少なかったか、それともデーモクリトス、プラトーン、その他の人々が、よく配列された弁論、華麗な技巧、洗練（いずれも美的なもの）を介して理性類似者に手渡したものを、クリューシッポスは自然的短さと単純な装いに於いて完全に、荘重に、正確に、判明に、学問的に、そしていわば理性と悟性に強いるようにして[2]提示したのであり、骨学者の適切に接合された骨格に腹が欠けていても非難されないが、それ以上に、貧しい貧弱なあり方の思惟は確かに成熟した判断自体に非難されないものであるか、そのいずれかである。しかし、これらのことがいかようであるとしても、キケローのこの箇所から次のことを推論せよ——貧弱さとは、大きさ、品位の欠点（§ 249）よりも、むしろ豊かさの欠如、或る種の貧しさ（§ 120、128）を指す。

（1） 原書では involuam となっているが、一字脱落していると思われる。つまり正しくは involutam とあるべきであろう。
（2） 以上の6つは論理的認識の完全性を構成する成分である。§ 22、558 参照。

§ 253

思うに、『ブルートゥス』114 にあるルティーリウスについてのキケローの判断は、事に決着をつけるであろう。「彼の弁論は貧しかったが、法については多くの輝かしい点があった」（私の誤りでなければ簡素でない事柄）。「博識な男で、ギリシア文化の教養があり、パナエティウスの弟子で、ストア派としてはほぼ完成されていた」（そしてこれは美学者の定式による、単純に立派な生き方には関わらない）。「ストア派の語り方は極めて鋭く、技術に満ちたものであるが」（そして、これは簡素さ、及びそれに似たものを知らず、§ 237、238、過度の抑制よりも膨張の方がストア派

には調和する)、「しかし貧弱で、一般民衆の同意に十分には合っていない」(というのも、拳に握りしめた手を欲求するものと、開いた手を要求するもの(§ 122)を、ストア派は、ゼーノーンの規則にも拘らず、必ずしも常に、十分実践的に区別していたわけではなかったからである)(§ 122)。ストア派一般を貧弱さの点で非難しているという包括性以外には、このキケローの決定に私は何ら異論はない。もし或る人が、より精密な哲学者らの講義に恒常的に出席し、その論理的悟性的省察にしっかりと従ったあとで、美的思惟内容の実践と実用に降りてきて、嘗てあった判明なる精密さと論理的正確さがまだかなり彼自身の思惟のあり方に付着していて、今となっては余分であり、除去すべきものであるならば、彼自身には多分公正な判断によって弁解の余地はあるけれども、弁証法の知識を持つ彼の思惟の仕方は、それ自身でも美しく優雅であると言われるに値するものであるかの如く弁護されることはできない[1](§ 121、124)。

(1) § 429 の最後の文参照。

§ 254

4) 簡素なあり方の思惟において欠如という誤りを犯している欠点(§ 245)(特にそれが十分な品位を否認される場合)を表現するためには、干からびたあり方の思惟という方がふさわしい名称であると私は言いたいほどである[1]。それはオウィディウスの次の箇所から言える。

「樹液の重み(§ 177)を失い、干からびて、変わりやすい風にひらひらと舞っているときの木の葉よりも軽い汝(§ 189)」。

しかし § 247—253 で述べられたあの悪しき短さも同じ仕方で表示されると考える人がいたとしたら、軽蔑すべからざる根拠を持つことになろう。例えばクィーンティリアーヌス 2、4 が、歴史的陳述は「決して干からび

たものであっても、貧しいものであっても、逆に、曲がりくねっていて、詩的破格を模倣した多くの者が用いる描写を呼び込んでふざけ回るものであってもならない（§ 165）」[2]と言い、「このいずれも欠点であるが、前者の方が悪い。なぜなら豊麗さからでなく、貧しさから出てきたものだから」[3]（つまり子供の場合、§ 247、248）とつけ加えているのがそれである。干からびていることは、過度によって誤る欠点である華美なあり方の思惟に対立する、欠如によって誤る欠点であり、我々は、貧しさと、完全な見かけの中間を行くべき[4]であることをここで了解せぬ者がいるであろうか。

（1）「干からびたもの」（aridum）を平淡体に対応する欠点とする例としては次のものがある。『ヘレニウス宛弁論術』4、11、16：「語のあのしなやかな細さにうまく携われぬ者らは、干からびた、血の気のない文体に至る。それを『貧しい』と呼ぶのも不適当ではない」。キケロー『弁論家について』2、159（§ 249 註（1））。フォルトゥナーティアーヌス、3、9（§ 248 註（1）に引用あり）。

（2）クィーンティリアーヌス　2、4、3。なお、歴史から詩を排除すべきことは § 584、590 で繰り返される。

（3）クィーンティリアーヌス　2、4、4。

（4）§ 246 註（1）参照。

§ 255

けれども、私の考えを一層明瞭に述べよう。**干からびたあり方の思惟**とは、広義では男性的美[1]が要求するだけの力、元気を持っていない（M、§ 515[2]）と観られるものの一切であると私は判断する。生気のないあり方の思惟は、これの一変容である（§ 111）。この考えからすれば、思惟が干からびていることとは、当該の美が要求するだけの豊かさ、又は品位、又は真実らしさ、又は生動性、又は説得性、又は生命（§ 22）の欠如全体が〈現象者となったもの〉ということになる。

(1) ここで「男性的」の語は、「力 (vis)」、「元気 (robur)」と結び付けられているが、§ 145 では「力 (vis)」と共に「美 (elegantia)」にも結び付けられている。そしていずれにおいても絶対的な美的品質が問題とされている。これに対し § 186 では、相対的なそれ、即ち品位の一層高い段階が問題になっている。

(2) § 26 註 (2) 参照。

§ 256

この概念からすれば、クィーンティリアーヌス 2、4 が「幼い芽が」最も「避けねばならない、乾いた一滴の水分もない」土地にそれを喩えているとき、彼は「干からびた教師」[1]に異議を申したてているように思われる。子供がもしこのような教師に出会うと、「直ちに低い者、即ち、日常語法を越えて」(豊かさ、又は品位、又は真実らしさ等の点で § 255)「何一つ高めようとしないような、いわば地面を観る者になってしまう。健康の代わりに痩身が、判断力の代わりに弱さがあり、欠点が無いようにと相当の努力をするうちに、長所が無いという当のその欠点に陥ってしまう」[2]。「貧しく、干からびた」(少なくとも理性類似者にはそう見えるような)「教授者の説明が心をひっくり返し、特にこれほど精妙な耳を痛める」ことがないよう「輝き」と「快さ」を幾らか自分の教育過程では「混ぜ合わせた」[3]と彼が語るのも同じ概念からである (3、1、尚、§ 122 参照)。

(1) クィーンティリアーヌス 2、4、8。

(2) 同 上 9。欠点のなさが却って欠点になるという議論は、§ 154 末に引用されたホラーティウス『詩学』の箇所、§ 210 において提示されたロンギーノスの議論で既に用いられていた。

(3) クィーンティリアーヌス 3、1、3。

§ 257

クィーンティリアーヌスは第8巻序文で、こうも言っている。「アジア派[1]の者たち、或は何であれ他の種類の頽落した者たちは、物事を知らなかったというわけではない。また我々が『干からびた』と呼ぶ者たちは、愚かであったり、事例において盲目であったわけではない。そうではなくて、前者には雄弁における判断力と節度が、後者には力が欠けていたのである」[2]。「前者とはアジア派であり、後者とは干からびた者らである」と私は解釈する。その典拠は第12巻10で、そこでは「干からびて、潤いがなく、血の気のない者ら」について「この人々は、健康という名——本当は全く逆なのだが——のもとに自らの無力を隠す者らであり、彼らは雄弁の一層明瞭な力（M、§ 515）に太陽の如く耐ええぬので、大きな名の影に身を隠す」[3]と述べている。他方、「アジア派」については、「その人々には特に判断力と節度が欠けている」[(4)]と述べている。

（1） § 240 註 (3) 参照。
（2） クィーンティリアーヌス 8、序、17。
（3） 同 上 12、10、15。
（4） 同 上 16。

§ 258

5) 血の気のないあり方の思惟[(1)]は、§ 255—257 の意味での干からびたものの同義語である。それは、キケローが、「小さな子供や、弱かったり体が不自由だったりする老人に剣を与えたとしても、自分の力だけでは誰をも害さない、……それと同じように、無気力で血の気のない人間に丁度剣のように執政官職が与えられ、その人間が自分だけではだれひとり刺すことはできなかった筈なのに……」（『セスティウス弁護』24）と言って、

「血の気のないもの」一般を「無気力」の語で説明していることからわかる。

（1） 典拠としては『ヘレニウス宛弁論術』4、11、16 がある（§254 註（1）参照）。

§ 259

6）貧しいあり方の思惟[1]は、乾いたものが欠点と解されるとき、これと同義である[2]（§ 248、128）。用例は、クィーンティリアーヌスの § 254 で引いた箇所、及び、詩人を解釈する「文法には、音楽、天文学、哲学、凡庸ならざる雄弁が必要であり、雄弁は」これらの学科の事柄を「ふさわしく、豊麗に語るためである」と教えてから、「それだけに、この技術を簡素で」（この語が何らか有害なものを指すときには、貧弱なもの、乾いたもの、及び非難される種類の繊細なものと一致する）、「貧しいものとして嘲る者らを許すべきではない」[3]（1、4）と続けている場合がそうである。同じ根拠でキケローは、「アントーニウスは、より貧しく、クラッススは、より充実している」[4]と見做されるという一般民衆の考えを非難している。そしてクィーンティリアーヌスは、「キケローが」或る人々には「貧しく干からびている」[5]と言われ、他の人々には「アジア的[6]で、富んでいて、反復過剰である」[7]と言われると述べ、「キケローの」悪口を言う人々の悪意を示している。非難されるのは、自分と対立するものに対する憎しみによるものであり、賞賛は黄金の中庸のものである。しかし、このうち第1の「貧しく、干からびている」という非難は、いわば正義の女神の一人が見て見ぬふりをしたので、目には目という法によって、キケローに向けられたことを § 251、252 は示すことになろう。

（1）「貧しいもの」を平淡体に隣接する欠点と考える箇所には以下のものがある。

ゲリウス、6、14、5：「大抵の場合潤いのない、貧しげなものが精妙なものととり違えられる」。

（2） つまり、「豊かさ」に対立する欠点としての「貧しさ」の規定に言及している。貧しさを豊かさと対立させる例としては次のものが挙げられよう。クィーンティリアーヌス 8、3、49：「ここから、一種の鈍く、汚く、貧しく、重苦しく、不快な、みすぼらしい言葉が生まれる。これらの欠点は、それに対立する長所によって最もわかりやすいものになる。つまり、第1のものは鋭いもの、第2のものは輝かしいもの、第3のものは豊かなもの、次いで、快活なもの、快いもの、洗練されたものからそれぞれ逸れたものである」。

（3） クィーンティリアーヌス 1、4、5。

（4） キケロー『弁論家について』3、16。

（5） クィーンティリアーヌス 12、10、13。

（6） § 240 註 (3) 参照。

（7） クィーンティリアーヌス 12、10、12。

§ 260

第2の、豊か過ぎるという非難については、キケロー自身が、貧しさの美的概念を十分に確定しているとみえるような仕方で語っている。それは『トゥスクルム論議』2、3で自分の弁論についてこう語るときである。「かなりの数の人が、思考と語の豊麗さに圧倒されるので、自分らは豊かさ、豊麗さよりも、寧ろ貧しさ、飢えの方を欲すると言った。そこからアッティカ派の文体が (§ 240) 生じた。しかし、それを追求すると公言した人々自身がそれを知らなかった。その人々はまるでフォルムそのものから嘲笑されて沈黙した」。

§ 261

7) 浅薄なあり方の思惟[1]は、詰まらぬもの (§ 221、245) の同義語で

ある。但し、その場合私は浅薄なものが〈低さ〉の第2の類であることは認めるけれども、簡素なあり方の思惟を要請するものに於いて絶対的大きさの欠如を考察するとき（§ 246)、浅薄に思惟されたもの全てがこれに関係するとは考えない。大多数の批評家が様々の言語を通じて等価なものとして使用している語の概念を分けることにかなり私はかかずらった（それは、これらの語を用いる人々のうちでも百人並の女には理解できない罵詈雑言のようなものである)。その結果、もしいつか健全な批評家らがそれを適用せねばならぬことがあったとするならば、美学者らは、自分が何を是認すべきかを前以て熟慮することができよう。そしてそのような言葉で指示されるものを十分明瞭に提示できるかどうか判別しておくことができよう。

（1）『ヘレニウス宛弁論術』4、11、16：「この語は浅薄で低俗である。なぜなら、細い文体が持つもの、つまり、純粋で選り抜きの語から構成された言葉に到達していないからである」。

§ 262

〈低さ〉の第2の類（§ 245）には、一層醜い種があろう。それは、確かに簡素だが、しかし大きくもあり、且つ又単純に立派な性格に調和的に描写されるに値する素材を、単純に立派な性格にふさわしくないもの（§ 224）へと貶めるものである。それが**簡素なものについての下劣なあり方の思惟**である。この醜さにプラウトゥスはしばしば陥る。またウェルギリウスのメナルカス[1]もそれに傾く。特にひどく非難されてきたのは次の箇所である。

「泥棒どもがそれほどのことを敢えてするとき、主人らはどうすればよいのか。極悪人よ、番犬のリュキスカがひどく吠えているのに、おまえ

がダーモーンの牝山羊を罠で捕らえるのを私が見なかったと思っているのか」[2](『牧羊詩』3)。

しかしダーモエタスのふさわしい言葉で始めて引き戻される。

「けれどもそんな雑言を男らに投げつけるのは、もっと控えめにするようにせよ」[3]。

そして立派な誘いで音楽の競技へと進む。『詩選』に所謂神秘的意味[4]を認めるならば、メナルカスが、はじめかなり粗野に語るように見えるにしても、この欠点をウェルギリウスに帰属させることはないであろう。

(1) ウェルギリウス『牧羊詩』第3歌に登場する2人の羊飼いの一人。
(2) ウェルギリウス『牧羊詩』3、16—8。
(3) 同 上 7。
(4) 既に古代末期にマクロビウスはウェルギリウスの『アエネーイス』に寓意的解釈を施し、古代宗教の意味が込められているとしたが、中世になると、ウェルギリウスにキリスト教の教義を見てとろうとする解釈が行われた。名高いのはウェルギリウス『牧羊詩』第4歌がキリストの生誕を予言していると見做すものである。このように、異教古代の著作に込められたとされるキリスト教的意味を「神秘的意味」という。尚、§ 802 も参照のこと。

§ 263

一般に思惟の美を醜くする欠点は、全て簡素なあり方の思惟に対立するものであるが、特に § 246—261 で指摘した欠点がこのあり方の思惟に対立している。特に

「汁が家畜から、乳が小羊から掠め盗られる場合」[1]

がそうである。さて、それに特有の〈逸脱〉を追求するとき我々はII、**膨張の第2の類**[2]に注目する。それは、簡素な素材について、或はもっと大きな素材の持つ簡素な要素、帰結について、それらの相対的大きさと品位

とが比較的に許すように見える最小の思惟よりも、真実に又は外見上大きな思惟が懐胎される場合である。この類の第1の種は、中間的な素材（§208）のみが登ることが現象者となるような高さ迄簡素なものを高めるものである。第2の種はなお高く、

「頭を高く上げて、星々に触れる」[3]

迄それを持ち上げるものである（§ 203）。

（1） ウェルギリウス『牧羊詩』3、6。

（2） § 217 の規定によれば、「自分の対象よりも大きい種類の思惟は膨張」であるが、この場合、対象が些事、簡素なもの、中間のもの、崇高なもののいずれであるかによって、膨張の第1—第4の種が区別される。このうち、第2の種はここで、第1の種は § 222 で、第3の種は § 279 で、第4の種は § 318 でそれぞれ言及されている。

（3） ホラーティウス『歌章』1、1、36。

§ 264

§ 263 で述べた膨張の第2の種をプラウトゥスは「自慢好きな兵士」の例で揶揄している。「ピュルゴポリニケース」[1]の幕を開くや直ちに次のように書いている。

「晴れているときの太陽の光線よりも明るい輝きが私の盾にあるよう注意を払っておけ……」[2]。

アルトトローグス[3]は既に答える準備をしていて、こう呼び掛ける。

「勇敢で幸運で、王者らしい風采のお方よ。戦士たるときは、軍神さえ言葉を発することもできず、あなた様の力量に自分の力量を比べる気がございません。」[4]（テレンティウス『去勢奴隷』4、6、3—5[5]参照）

クィーンティリアーヌスの次の言葉もこの種の膨張からひとを引き離そうとするものである（6、2）。「というのも、些細な係争に悲劇を持ち出す

のは、丁度ヘラクレスの仮面と長靴を子供につけようとするようなものだから」[6]。

（1） プラウトゥスの『自慢好きな兵士』の主人公の名で、「塔と町を征服する者」の意。
（2） プラウトゥス『自慢好きな兵士』1—2。
（3） ピュルゴポリニケースの寄食者の名。
（4） プラウトゥス『自慢好きな兵士』11—3。
（5） 741—2。
（6） クィーンティリアーヌス　6、1、36。なお § 703 参照。

§ 265

ペトローニウスのトリマルキオーは、決してたわ言を言っているようには見えぬときですら、やはり第2の種を驚くほどよく例示している。「トリマルキオーはメルクリウスの杖を持ち、ミネルウァの指導で計算を学び、会計係にされ、とうとうメルクリウスに顎をつかまれて高位へ引き上げられた。ペガサスに見えるよう翼を付けられた自分の兎と共に。」[1] 他方第1の種（§ 263）をペトローニウスが描いているのは、自分の奴隷のために懇願する者らに向かって次のように答える、トリマルキオーの「金貨を数える会計係」の場合である。「私の心を乱すのは損失でなく、寧ろ最も役立たずな奴隷の不注意である。彼は私の客が私の誕生日に私に贈ってくれた饗宴用の衣服を失くした。一度染め直されているが、確かにそれはテュリアの紫である。だから、それが何物であれ、あなたがたに差し上げよう」[2]。

（1） ペトローニウス　29、63。
（2） 同　上　30。

第20節　中間のあり方の思惟

§ 266

II、**中間のあり方の思惟**（均一な、中庸な、介在的な[1]、節度あるあり方[2]）とは、中間的な素材について（§ 208）、それらの自然的大きさだけでなく、相対的品位と性格の高貴さに矛盾するものを何一つ含まず、加えてそれに著しく調和し、釣り合っているように思惟するものである。それが簡素なものと崇高なものとを媒介するから中間と呼ばれるのか、それとも簡素なものと崇高なものとの間にあるからなのか、はキケロー『弁論家』21[3]（§ 208）で論じられている。そこでキケローはこう言っている。「語ること」（思惟すること）「に於いて所謂一様な調子で流れ、流暢さ、均一さのみをもたらす……」。

（1）　キケロー『最もすぐれた弁論家の類について』2：「これに対し、或る人々は壮大、荘重、豊麗であり、或る人々は簡素、繊細、簡潔であり、或る人々は両者の間に介在し、いわば中間であると考えて多くの文体を分類するとしたら、人間の実際のあり方については何事かを語っているが、物そのものについてはあまり述べていないことになる」（下線筆者）。キケロー『弁論家』21：「さてこれら両者の間に介在する中間のもの、いわば中庸を得たものがある」。

（2）　括弧の中に与えられた中間体の4つの別称のうち、「均一な」は§266—8において、「中間的な」は§269において、「中庸を得た」は§270—1においてそれぞれ分析される。

（3）　キケロー『弁論家』21：「両者に関与している。或はむしろ本当を言えばいずれにも関与していない」。尚、『弁論家について』3、199（§268註(1)に引用）、ゲリウス、6、14、3：「中間体は境界にあり、両者の様態に関与している」参照。

§ 267

私の見るところでは、キケローは自らの定義でなく他の人々の定義から語っている[1]。これに対しキケローが自らの「弁論の法廷的種類」の思惟を、「哲学についての」書物で追求する「均一で、節度ある種類」の思惟から区別するときには（『義務について』1、3)、キケロー自身が、哲学的なことについて話すときには中間の（§ 266）あり方の思惟から語ろうとしたのに対し、「語ることの一層大きな力」は弁論一般に属するとしているのではないか、という疑いが多くの人々に生まれる。この中間のあり方の思惟が、まるで歴史の特徴であり、個々の作家に普遍的であるかのように歴史のジャンルに帰せられる[2](§ 126）のも、同じ誤りによるものである。寧ろ**広義の均一なあり方の思惟**とは、自らの素材が低く沈むときも、高まるときも、その素材に一致しているものである。他方**狭義の**それは、たとえ別々の物事を、若しくは同一の物事を異なる様々の観点から美しく考量すべきであるとしても、相対的大きさ、品位の点では、現象者となるほど大きな思惟の多様性を必要としないような仕方でその素材を相対的に取り扱うものである。

（1） § 266 末の引用で「一様な調子」に「所謂」が付されていることからバウムガルテンはそう判断したのであろう。最近の註釈家らも同意見である（cf. J. E. Sandys. *M. Tullii Ciceronis Ad M. Brutum Orator.* Cambridge, 1885. p. 25; W. Kroll. *M. Tulli Ciceronis Orator.* 1913. p. 33)。

（2） キケローは、§ 126 にある『弁論家』2、36 の引用部分、及び次の箇所で歴史が「均一さ」を持つ文体で書かれるべきことを要請しているようにも見える。キケロー『弁論家について』2、54：「しかしそのコエリウス自身、主題の多彩さで歴史を際立たせもせず、語の配置と、言葉の滑らかで均一な流れで作品を磨き上げることもなく……」。

§ 268

思惟の中間の性格[1]は常に一定の均一さを持っている。それは下降しても簡素さとの境界を越えることなく、又、上昇しても崇高さとの境界を越えることもない（§ 266)。しかし、思惟することに於いて必ずしも全ての均一さが同時に中間の性格をも表示するわけではない。簡素なものにも、崇高なものにもそれなりの均一さがある（§ 267)。

（1）「中間的なもの」(mediocre) 乃至「中間性」(mediocritas) を以て中間体を表示する代表的な箇所は以下の如くである。『ヘレニウス宛弁論術』4、8、11：「1つは荘重なもの、もう1つは中間的なもの、第3は抑制されたものである」。キケロー『弁論家について』3、199：「この双方の文体に関与し、一種の中間性によって賞賛されるもの」。同、212：「一層充実したもの、一層簡素なもの、及びあの中間的なもの」。ゲリウス、6、14、2：「我々もまた、第1のものを『豊かなもの』、第2のものを『精妙なもの』、第3のものを『中間的なもの』と呼ぶことができた」。フォルトゥナーティアーヌス、3、9 (Halm, 126, 2-3)：「〈中間のもの〉、即ち、中間的なもの乃至節度あるもの」。

§ 269

もし次の2義の間の曖昧さが妨げとならないならば、私は中間のあり方の思惟を中庸なものと言っていたであろう。1) ペリパトス派のいう「過多と過少との間にあるあの中庸」[1]を愛する者の言うそれ。この意味に於いては、賞賛されうるものは全て中庸なるものである。2) ホラーティウスは

「人々も、神々も、書店の柱も、詩人が中庸であることを許さないものだ」[2]

と公言しているが、その彼に与するばかりでなく、かなり美しく思惟され

るべきこと全てにもそれを類似の理由で関係づける者の言うそれ。かかる思惟内容が最高の喜びからほんの僅かでも離れるや否や、

「丁度それは、快い食卓の間では不協和な和音や、どろっとした香油や、サルディニアの蜂蜜漬けの罌粟の実[3]が、それらがなくとも食事をすることができたが故に不快であるようなものである」[4]。

この意味では、美的なものにあって中庸なものは何ら望ましいものではない。実際、中間のあり方の思惟は、1）の人々には中庸なだけではない[5]ように見え、2）の人々にはあまり中庸であるとは見えぬ[6]ことになろう（§ 266）。

（1） キケロー『義務について』1、89。

（2） ホラーティウス『詩学』373。

（3） § 165 のペトローニウスは、過剰な装飾を罌粟に喩えている。ここでは、幾分ニュアンスを異にし、必ずしもなくともよいものの喩えに用いられている。§ 624 では、大きい明るさを持つものの喩えに用いられている。

（4） ホラーティウス『詩学』374—6。

（5） 本段落の 1)、2）で述べられた「中庸なもの」の2つの意味のうち、1）の方は「両極端の中間にあるが故に賞賛されうるもの」というただ1つの徴表しか持たず、バウムガルテンのいう中間のあり方に比べると外延が広すぎ、更なる限定を加えてやらねばならない。従ってここで「中庸なだけではない」と語られたのである。

（6） 2）の意味における「中庸なもの」とは平凡、凡庸なもののことである。然るにバウムガルテンのいう中間のあり方は、美しく思惟するあり方であるから、それ自体プラスの価値を持っている。従って、凡庸という意味に中庸を解すれば、中間のあり方は「あまり中庸であるとは見えぬ」と語られたのである。

§ 270

中間のあり方の思惟が何故節度あるものと呼ばれるのかは既に § 267 で

見た[1]。即ち**節度あるあり方の思惟**とは、**広義では**、思惟の全ての力に於いて（§ 22）望ましい中庸を表示する（§ 269）場合、**狭義では**、あまり激しい心の緊張が美しくありえぬような観点においてそれがそのような主題に適用された場合を言う。前者は

「険しい状況にあっては平静な心を保ち、同時に、順境にあっては過度の喜びを自制した心を保つ」[2]

ことのできる人の思惟のあり方として期待しうるようなものである。キケローが『弁論家について』2、212 で、「緊張の厳しさが弁論家自身の温厚さによって抑えられる一方、穏やかさの緩和が一種の重々しさと緊張によって強化されるものほど節度ある弁論はない」と言うとき、今問題となっている中間のあり方の思惟の規則を与えようとはしていなかった。ここでは彼は、広義で節度があると私の呼んだあり方の思惟について語っているように思われる。

（1）「中庸を得たもの」（temperatum）としての中間体の表示はキケロー『義務について』1、3（§ 267 に引用あり）、『弁論家』21（§ 266 註（1）に引用あり）、53、95、100 にある。

（2）ホラーティウス『歌章』2、3、1—4。

§ 271

これに対し『弁論家』91—96 でキケローが語っているのは、我々も今扱っている中間のあり方の思惟（§ 266）に他ならないと一見したところは一層確実に判断されよう。彼はそれを「適宜」で「節度あるもの」と呼びつつ、「低いものと極めて豊かなもの」の間に置いている。然し彼はそれをこう記述している。「確かに、低いものよりは頑丈である。しかし活力は最も少なく、低いものよりは充実しているが、飾られた、豊麗な文体よりは抑えられている。その文体では共通トポスが緊張なしに語られる。

このような者（弁論家）は、専ら哲学者らの学校から湧き出る。彼らの或る者は、あの一層強い者（即ち次に述べられる「豊かで、豊麗で、荘重な者」）と面と向かって比較されぬ限り[1]、それとしては評価されるであろう。」[2]既にこのことからして推測できることであるが、ここで節度あるあり方の思惟は、一般に、そしていわば抽象的には、力と強さが中間的（§ 270）と考えられるが、それが適用される素材や美しく思惟することの形式を、それらが互いに異なる限りにおいて、いわば具体的に見てみるならば、結局のところ賞賛も非難も奪い取ることになるものである。キケローは結局節度あるあり方の語り方を雄弁家の中には入れず、「低いことを繊細に（第19節）、大きなことを荘重に、中程度のことを節度ある仕方で語りうる者を雄弁家と」認めているのであるから[3]、キケロー自身が全ての疑いを取り除いている。真に美しいものにおいて中間のものと呼ばれるに値するものは（§ 266）、キケローの言う節度あるあり方でなく、中庸なもの（中間のもの、灌木）を思惟する節度あるあり方であり、それが又§ 270、268 の意味で狭義での節度あるものということになろう。

（1） § 395「しかし比較の恐れの外に位置しているものらによってならば……」。
（2） キケロー『弁論家』91、95。
（3） 松尾大「forma eloquentiae と genera dicendi—*Orator* に於けるキケロの文体理想」『西洋古典学研究』25（1977）、91—101 参照。